

「映像記録・日本民衆史学」 大阪・泉南地区におけるアスベスト被害と石綿村百年史Ⅱ

研究年度・期間：平成 21 年度

研究ディレクター：原 一男
(映像学科 教授)

共同研究者：大森 一樹
(映像学科 映像学科長 教授)

学外共同研究者：森 裕之
(立命館大学 政策科学部 准教授)
友長 勇介
(フリー 写真家)

太田 米男
(映像学科 教授)

村松 昭夫
(京都大学 法学部 客員教授
大阪弁護士会 弁護士)

小林佐智子
(映像学科 非常勤講師)

豊原 正智
(芸術計画学科 教授)

袖岡 一禎
((泉南地区のアスベスト
被害と市民の会)代表)

犬伏 雅一
(芸術計画学科 教授)

下地 毅
(朝日新聞 鳥取総局 記者)

中川 滋弘
(映像学科 教授)

澤田慎一郎
(京都精華大学 人文学部
環境社会学科 学生)

私たちの研究は、“映像による対象者の記録”…映像というメディアの使い方としては、もっともオーソドックスな方法を選んだ。

つまり、取材対象者と信頼関係を構築し、対象者となる人々=民衆の“生活のありよう”を、カメラを回しながら、じっくり耳を傾け、記録していくというものである。

カメラを前に、緊張もし、照れながらも、自分の生の軌跡を語る人たち。ただただ、自分と家族たちの、ささやかな幸せを求めて生きてきた人たち。決して他人を踏みつけにしようとすることもなく、身の丈以上のものを求めもせず、野心など微塵もなく生きてきた人たち。

この1年を通して取材を継続した中で、私たちが感じ取った、もっとも大きなものは、“なんとイノセントな人々なんだらう”という驚きを含んだ感動である。

そんなイノセントな人々のひとりひとりが、ニッポンのどんな風土の中で、どういう親から生まれて、生んでくれた親もども、暮らしていける場所を求めて、日本のどの地域を移動してきたか、そして、住み着いた場所で、どう生計を成り立たせるためにどういう職を得たのか。出会った、やがてパートナーとなる異性は、どんな相手か、結婚し、子どもを産み、どういう生き方を選択してきたのか、を追っかけてきた。

“手に技術”を求められず、学歴を問われることもなく、年齢も関係なく、誰でも求めれば受け入れてくれる職場、それでいて日当は、かなり良かった。

ただ、労働は、ホコリ=アスベストの破片が始終舞っていて、呼吸するのがつらかった。が、そのホコリ=アスベストが、深刻な牙を剥き出して命に襲いかかってくる危険性については、誰も教えてくれなかったから、それほど気にもかけず、こんなものだと割り切って、仕事に精

を出した。

やがて、ホコリ＝アスベストが体中に侵入し、肺に引っかかり、内臓器官を傷つけ、破壊し、命を奪い始めていく。命を奪われる人がでて、さすがの無辜の人たちも、気がつき始めた。

知っていれば、いくら賃金がよくても、ここで働かなかったのに…と悔いてもせんないこと。利益を追求する側は、ヤバいことは伏せておくことに限る、という態度。

実は、クニは、そのヤバさを知っていたのだ。知っていて、何もしなかった。やろうとしなかったのだ。だから被害が拡大したのである。

お上にももの申すことを知らぬ人たちだったが、さすがに、ことの理不尽さに、イノセントな人たちも立ち上がった。裁判という場で闘い始めたのだ。

私たちは、これらの人たちへのインタビューを継続する中で、興味深い事実直面し、さらに追求を深めたいと考えている。

一つは、イノセントは人たちの出自の問題である。

統計的に…と言えるほど特徴を持ったパターンがあるわけではないが、受難の地＝「石綿村」泉南市に棲みついたが、それぞれ個別の出身地を聞いていくと…、隠岐島(島の中でもさらに辺境の村)、鹿児島(奥深い山間地)、沖縄だったり、と基本的には、地理的にニッポンの辺境の地から漂流して、そして「石綿村」泉南市に行き着いた、つまり、辺境の地とは、経済的にも貧しい、ということの意味し、“少しでも、いい暮らし”を求めて、このクニを流動する人々がいる、ということ。

さらに、「石綿村」泉南市におけるアスベスト産業を支える人たちの中でも、在日韓国人である人々が圧倒的に多い、ということ。在日韓国人たちの存在が圧倒的に多い、ということは、この国の戦後の政(まつりごと)の影を浮かび上がらせている、と言えるのではないだろうか。

在日韓国人の人々のことに、もう少し触れるなら、アスベスト産業の構造に現れてるのだが、その歴史において、初期の頃は大企業が担っていたのだが、次第に、中小の企業、さらに個人の事業者という存在に変貌していく。在日韓国人たちは、当初、労働者として関わっていくのだが、勤勉な人たちはやがて紡織機を自ら所有し、家内工業的な零細事業所を起こしていく。

このことがイノセントな人々の救済の状況を複雑にしている。つまり、ことが補償問題へと展開していったときに、資本家対労働者という構図を前提にした解決の道を成立しにくくさせて

いる。資本家といっても、ただか家内工業的な零細事業所である。災害補償の支払いを命じられても、その能力はない。その上に、資本の側も労働の側も同じ民族である。同じ民族同士ということもあり、家族ぐるみの付き合いといった親密な関係で維持してきた場が、加害対被害という関係に変貌したときに、イノセントな人たちの困惑は、どんなものだっただろうか。

死者の数も増え始め、社会問題化し、報道の量も増え、さすがのクニもその勢力を無視できず、アスベストの使用禁止へと舵を取らざるを得なくなり、裁判の場での戦いへと収斂されていく。

私たちの、1年間の作業は、とりあえず、ここまでである。引き続いて、今後の推移を見守りたい。そして、イノセントな人々=民衆という存在の堪え難い命の軽さをあぶり出したい、と願っている。

泉南アスベスト被害 調査・取材対象

- ◎旧栄屋石綿工業所跡地 樽井駅前一带
- ◎旧三好石綿工業所跡地 新家駅前一带
(現 三菱マテリアル建材 本社東京)
- 他、旧ホンテス工業跡地(樽井)、旧光陽石綿跡地 等

○大阪泉南アスベスト国家賠償請求訴訟

第一次原告

- ・石川チウ子 (泉南市)
- ・青木善四郎 (現 堺市)
- ・西村 東子 (泉南市)
- ・江城 正一 (泉南市)
- ・岡田 春美 (阪南市)
- ・岡田 陽子 (阪南市)

第二次原告

- ・赤松 四郎 (泉南市)

○泉南地域の石綿被害と市民の会

- ・林 治 (泉南市)

○大阪じん肺アスベスト弁護団 公判・報告集会記録

○クボタ周辺地域住民被害の証言

- ・飯田 浩 (尼ヶ崎市)
- ・古川 和子 【中皮腫・アスベスト疾患・患者と家族の会】

●医療

- ・みずしま内科クリニック 水嶋医師